



日本王代一覽

參

僧
775
121



775
121

日本王代一覽卷之三目錄

六	六	二	一	十	九	五	八	五	七	六	五	四
圓融院	冷泉院	村上天皇	朱雀院	醍醐天皇	宇多天皇	光孝天皇	陽成天皇	清和天皇	陽成天皇	清和天皇	清和天皇	圓融院
在位十五年	在位二年	在位廿一年	在位十六年	在位卅三年	在位十年	在位三年	在位八年	在位十八年	在位十八年	在位十八年	在位十八年	在位十八年
貞元二天	安和二天	應和三天	天曆九天	承平七	昌泰三	自仁和三	平九	仁和四	至寬	元慶八	元慶八	元慶八
元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三	元延三



六 花山院
五 一條院

在位二年
在位廿五年

永觀二
寬和二
永延二
正曆五
長保五
長德一
永祚一
長弘四
寬弘八

六 三條院
七 後一條院
八 後一條院
九 後朱雀院
十 後冷泉院

在位五年
在位廿年
在位九年
在位廿三年

長和五
寬仁四
萬壽四
長曆三
寬德二
長久四
永承七
天喜五
康平七
治曆四

日本王代一覽卷之三

五十六代

清和天皇

文德天皇の太子なり御禪ハ惟仁母ハ

深殿后藤原明子なり女後大后良房の娘なり生ク

九月イノチイノチ太子小立リ天安二年八月文德崩十月

太子九歳ニシテ即位シ於テ和泉房攝政ニシテ藤

原氏攝政の娘なり日牟ヒムイノチイノチ切カキイノチ帝位ニ即

事ハ是天皇と母とニシテ伊勢大御宮并小諸の山邊

即位の由と考ふる外後母源潔カヨキ姫小正一任と贈り

此ハ攝政の娘ニシテ良房の室深殿の后の母也

今年智達廣より帰朝ス

貞觀元年正月年始の節會等諒闇の内をれば清



これと止り。二月大和の三輪明神等小正一位と授り其介諸國の法社へ神位と多く授り右大臣藤原良相宗親院と建て藤原氏の宅を居る者と居るの延命院と建て藤原氏の病ある者と居る。三月和氣蘇範と勅使して宇治八幡へ即位の者をとりさる帝王一代小一度つゝ宇治へ勅使とさる毎夜和氣氏小命とて清麻呂が先例さる。四月播津國の中少遊捕の地と右大臣源信小賜。同月賀茂の宗左右近衛府右衛門府右兵衛府とて警固せしむ。六月渤海使者烏孝慎が船加賀の國へつゝ安倍清行と加賀國へ遣られ其書簡を受給て却へ捧げ勅書と賜て都へ入るる。貞

田國せしむ。七月賀茂松尾平野大原野三輪春日住吉氣比目前等の社へ勅使と遣る。十一月大嘗會と約り其儀式備まり此年僧行教宇治へ参詣八幡太神王城へ赴て齋戒と守る。この宛宣あるより奏聞し始て山城國男山石清水宮と建てて崇り。二年正月大學博士春日雄繼孝経と天皇に授奉る。これより後帝王の讀書始て大方孝経と用り。二年二月左大臣良房の館より幸百官皆供奉良房の家へ等留候と授り。三月東大寺の大佛の修理成就りなより供奉約り。六月渤海使者船加賀國へつゝ禮法乃ふりてこれより

延喜三年 六月前殿より 皇相様と沖覚せしむ

八月天皇輪詔と讀春日雄繼侍講

四年三月在原業平從五位下叙と平城天皇の孫
河保親王の子なり

五年正月大納言右大將源定平と後醍醐天皇の愛
子なり同月小其兄大納言源弘平と先皇の孫と好

筆法不達し管筆と好り 八月沖覺死と崇道

天皇伊豫親王藤原夫人吉子攝逸勢文室宮内麻呂等

が怨靈と祭る是と沖覺會と云近年打續疫病を

己此年の春より殊小甚くして人多死なりと此等の

怨靈の所なること者ありたりと此祭と行ふ

十月良房と更く富と賜り六十の領と行ふ此年良

房奉て春澄善純とて續日本後紀と作りし

六年正月元日天皇元服と富沖覺十八藤原氏

重兒十八同時小元服と 二月良房の館へ行幸

和と沖覺と沖覺又射場と天皇自ら沖うと射

は多ひて射ふあり又山城守紀今守と命し

畧民とを連きて田と耕と仰と沖覺と備へらる民

の艱苦とありとめとやとよとの事なりと

七月富土山崩と十日餘大渚と山との磐石崩と海と

浪とて文字里より人家も多くなりと沖覺の方

より櫻あて流し八甲斐の國の方へ校物なり

七年四月和氣藤範と初使しと右清水の八幡橋

弟鞍等と奉納せしむ 八月藤原和直と對馬

賜ふ賜て銀元と握しむ霖句ふよりて其元の道
塞る也なり

六年二月右大臣相が百花亭の事 閏三月朔日

良房館(行幸所)の所遊あり 四月十日夜應
天門焼亡を放火なりと云々沙汰あれども大災の
とつらゆと知れ沙汰は良房はわくおはし政と良
相は信せし沙汰河大御言伴善男と云者あり左京
右のれども其間をさゆふ左大臣深信と遷け良
相左大臣となり已右大臣となり下と申て應天門
の焼亡は左大臣の所為なりと新(ラウダ)良相を信し
善男と同道し疎彦(出て赤藏中将基経と呼て
左大臣逆心ありて應天門を焼たりと云々行向て

此明せしと云基経少くも政を信し沙汰ありたりと問
良相沙汰は左大臣なり佛法を信して政ふむるは
故ふむる沙汰と知れと云基経は天下の大宰
たりと政左大臣の事知なくは兼(カミ)引(ヒキ)か(カ)し(シ)を(ヲ)即(ス)ち
はと云て良房は左大臣と云て曰く先帝時
今上太子たりし時此人の力ふりて沖佐(ウツサ)と云たり
細れは左大臣の功なり何の罪ありん左大臣罪な
かりて良房先殊せしと云と云せしこれよりて
左大臣は左大臣なりかして二月廿六日宅鷹取と云あり
應天門は善男父子夜半竊ふりて大とつけし焼て却て
左大臣の所為なりと云と云なり新(ラウダ)は赤藏南(アカザカミ)別(ワケ)年
名藤原良房奉て此明と云れは給れなく善男が不

乃不寤るに罪不行るべし然れども一等と減して伊豆國へ
流るる其子た因頼流るる流るる是後ハ良相の養
子たり後ハ昭宣とてり人たり 七月深殿
右后病氣淑山相應祈て験ありふより傳教慈覺
共ハ大師の謚とらむる相應ハ慈覺ウ智子たり慈
覺ハ貞觀六年小寂せり

九年十月右后良相薨也

十年十月右后深信薨也學問書畫管法馬鷹
のこころをた達しなる人たり

十一年四月大納言藤原氏宗并小倉義大江音人
刑部卿菅原是善等奉て貞觀格と撰て奉る
音人も博學の人たり菅原江家と相並て代

儒宗たり 六月奥羽大池震死者千餘人

六月新羅海賊博多へ來て豊前國の首船と濫
妨て大宰府より兵とあし是と捕る賊船早に逃歸
十二年正月藤原氏宗右后とる深駐藤原基經大
納言とる駐ハ嵯峨天皇の子たり

十二年二月天皇紫宸殿御ありて如て自ら政を
聽たふ仁明天皇より御前ハ主上毎自紫宸殿へ
御あり文徳の代より以後此儀を今又舊禮小
以る人皆好ふ 四月良房小食祿を加へ隨力兵仗と
なるり之宮不推せしふ推之宮是より好る

八月右后氏宗奉て貞觀式と撰て奉る

九月六條の后藤原順子崩て仁明の后文徳の母たり

十二月渤海國の使者楊成規等加賀國小着岸之
十四年正月廿日訖菅原道真等とて渤海の使者と
挨拶せしむ道真ハ菅原道真等とて渤海の使者と
氏宗薨之 二月良房疾あり然り千萬と賜て
祈禱の料とて又度者八十人となるふ傍に眞雅法
務小任也 六月渤海の使者京不入鴻臚館ハ
その宴と賜ふ在京の間在原業平等勅使として
行て答ふ其介文人等約向て糸倉と都良等も
其挨拶とて其良房ハ博學の人なり其後使者勅
書と賜り参内ふ及て鴻臚館より内閣鴻臚館ハ
玄菟寮より契所なり東守羅成門の者不
あり 八月源融左大臣とて藤原基経を左大臣と

九月百大政大臣位藤原良房薨之年六十九正一
位と贈り美濃公封一忠仁とて源融基経
と左右大臣とて改と純とて威權也基経あり
十六年二月新小道場と建て貞觀寺と號と大齋
會と設る 三月源融院院也其大形也内書(到)
基経等急奏とて大と防りめと早くとつる源融
院ハ源融天皇位とて後とらせし事あり
十七年正月冷然院院也其院院天皇の臨幸下なり
納言の文書其介財寶活減之太原雄廣とて著大
と防り院院也 四月天皇五經史記群書活宴と讀
菅原是善菅野佐世大臣等校奉る
十八年四月十日大極殿其介殿門多と院也院也

欽あつるあつりて勇士とて海軍と巡検せしむ
六月伊勢并賀茂松尾の杉(勅使と遣)大極殿
焼亡の事とすりしり 七月大極殿と作 十月
天皇位と第一の皇子貞明親王と譲る右大臣基経と
あて攝政せしむりし忠仁との例のこゝし 十二月
清和のあつりて天皇の尊号と奉る後水尾山入る帝
よりて水尾帝とすりしり年号貞観在位十八年

わ十七代

陽成天皇 清和の皇子より詳ハ貞明母ハ皇太后藤
原高子と云故中納言長良の娘とて右大臣基経
の妹より世小二條帝と云ハ是より此帝貞観十年小
生れて同十一年よあつりしり十八年十月清和

位と譲るの元慶元年正月百天皇即位大極
殿い海と送るのあつりて豊樂殿とて行りしり
年八歳よりハ基経攝政印右藤原長良よ右大臣
正位と賜りしり 二月渤海の使あり右大臣よりこれ
とゆえ 六月早しと久雨降る伊勢以晴賀
茂等法行へこれと譲る 十月大嘗會

十二月元慶寺と送る
二年二月善洲愛成とて日本紀と續し
三月右大臣の夷賊千餘人執り秋の城と焼く同月
藤原興世と訪り殿軍とすりしり 右大臣討りし由進を
冒月又賊と残る右軍殿とすりしり 六月藤原保則
とあつりて遣るれ道國の兵とりのあつりしり

六月小野春風と鎮守府將軍より奥羽(遣)兵を催し又東海道の國々より加勢と申しし七月保則出羽より到り賊と討て小利とせりあるととも賊津輕等の地も猶充滿と九月國東國々大地震

二年正月お初め夷賊津島一國中軍事の也遠之六月清和太上天皇落飾 十月大極殿成就と郷宴と行ふ

四年三月お上天皇山城大和攝津の各山佛岡と見巡り丹波水尾寺へ入りたふ意と佛法ふりし事て預託の行とすなり 六月左中将在原業平来り最む十六條秋達者好色の人なり

十月八日右大臣基経攝政とじて國白くする是國白の始なり此月の末よりお上天皇不例

十一月四日基経を政大臣に任じ良房基経父子相續し攝関相國たりより朝廷の権柄を藤原氏にゆきお上天皇崩と歳三十一掃の迄あり

六年正月二日天皇元服基経加冠より大納言源多理發たり其儀式者重なり源多右大臣となる藤原良世藤原を緒大納言たり在原行平源能右中納言とあり 二月基経准之宮隨乃兵仗と賜る

七年正月渤海使者裴題等加賀國へ来る勅ありし四月京入り鴻臚館へ入る皇親此時ハ文章博士たりしが假令治部大輔とありて渤海の使者と挨

二年正月基經嫡男時年十六歳内裏よりひて元服
天皇御多つゝ加冠し給ふ基經捧ぐの物と献
ふて謝し奉る 八月丁未釋奠例のごとく
博士周易と講く基經及て孔子と拜く
十月十日菅井川野へ行幸鷹狩し給ふ天皇
遊獵と好く屢出御あり
二年八月伊勢清水日吉等へ奉幣使とまらる
九月山城國大原野と湯成を天皇へまらせ遊獵
の地とす 八月内裏より掃くの喧あり九月二十
六日天皇崩す歳十八也よりさる年城巖磯守
詩文と作ことと好む其法は文才の巨とす
此天皇倭歌と好む也(是より世人は倭歌と志と

とひて要とす 在位二年 年号仁和

五十九代

宇多天皇 光孝の實子なり 諱は定省母は皇后
班子仲野親王の娘なり 光孝即位せざる時仲子
達不戯て我若帝位小昇くは汝等何のやうあり
と云ふ即ち忠告を賜ふと云ふ次郎也自らを
東海道と賜れと云ふ即定省は東宮小主人と云其後
光孝即位定省侍從に任じ光孝の病中基經等
がそのあまよりて定省と云ふ子とて禮をく光孝崩す
基經太子と大抱臨(誘引)即位せしむし御歳
二十一時仁和三年十月十七日なり 基經上表して
政と儀と天皇我今孤たり若輔佐と有りて政と

せしむる三井寺智證^{ナシヤ}其く加持^{カチ}也

三年正月十日國白太政大臣藤原基經^{キキヨ}薨^シ年六十
六正一位と贈られ越前公^{エノノミ}封^{トウ}一^ニ取宣^{トクノノミ}中^{ナカ}と^ト益^{マシ}也

三月大納言藤原良世^{ヨシヨ}右大臣と^トなる昭宣^{シロノブ}公の嫡男
時平^{トキヘ}参議^{サンシ}に任^トぜ

閑山^{カンサン}あり

四年六月時平檢非違使^{ケンビワイシ}別當^{ベツトウ}となる菅原相小
勅^{トウ}して類聚國史^{ルイゴクシ}と作^シしむ

六年二月時平中納言^{ナカノリ}に任^トぜ右大將^{ミナモトノサマ}と兼菅原相
参議^{サンシ}に任^トぜ菅原相の家業^{ケノノト}を継^ツぐ情學^{セイガク}文章^{ブツブツ}殊^トよ
まに^ニなる故^{ユヘ}に天皇^{テンノウ}乞^ヒて登庸^{トウヨウ}せしむ
在原行平^{ハラノユキヘ}卒^シ年^ト七十六

六年八月菅原相と遣^{タタ}唐^{タウ}大使^{テイシ}に紀長谷雅^{キハセマツ}を副使^{フクシ}
に任^トぜ其^ノ才^ノと云^フる人^ヲに^シて^シ此^ノ官^ヲと授^ケらる^ルこと^トも^シ
此^ノ大^ノ唐^ノ礼^ノ周^ノとあり^{タリ}なる人^トも^シ又^シ唐^ノの^ノゆ^ノ法^ヲを^シ長^ノ谷^ノ
雅^ノも漢書^{カンショ}文選^{ブンセン}其^ノ外^ノ群書^{グンショ}と讀^ミく大^ノ才^ノの人^トなり

九月新羅^{シンラ}の賊^ノ賊^ノの^ノ才^ノ許^ノ對^ノ馬^ノ國^ノ來^リる右^ノ宰^ノ府^ノ
より筑前守^{ツクノノミ}文室^{フムシ}善友^{ゼンユウ}大將^{テウサマ}と^ト對^シ馬^ノ國^ノ行^キ向^スて三月

餘人^{ヨリ}と討^ツ殺^スし其^ノ賊^ノ并^ニ武具^{ブク}等^トと奪^ヒ取^ル十二月
僧益信^{ソウエツシン}聖賢^{セイケン}其^ノ法^ヲ抄^テと掌^ルる益信^{エツシン}八^ノ和^ノ寺^ニ小^ノ居^リ

聖賢^{セイケン}八^ノ醍醐^{テイコ}小^ノ居^リる清真^{セイマコト}言^フ宗^ノの^ノ名^ヲあり^{タリ}四月
渤海^{ホクセ}の使者^{シヤ}裴文^{バイブン}籍^ノ名^ヲ鴻臚^{コウロ}館^ニと^ト迎^{ムカ}接^スあり^{タリ}也^ト

元慶七年小^ノ居^リる裴^ノ翹^{テウ}と^ト同^シ人^トなり^{タリ}此人^ノ菅原相^ノの^ノ代^ニ
まり^{タリ}請^ヒと^シて^シ大^ノ唐^ノの^ノ白^ノ樂^ノ天^ノ小^ノ似^リり^{タリ}と^シなり

七年二月神泉苑(行幸)櫻花と淨院菅原相等供
奉 八月左大臣源朝光と歳七十三は八條河原
院と作り庭ふたを池と掘毎日數百人の人夫と
して攝津尾前の浦より水と運しめ毎月塩三
十石充其中(入)陸奥國の塩電(似)又急ぎ出
しうい草花等とせうりしめあげて計せしは河原
左大臣と號せし 十月菅原相中納言小任せし
六年二月六日雲林院(行幸)ありて子日の遊あり親王
公卿供奉 七月藤原良世左大臣となる源頼有右大
臣となる 九月二條河原清和の母 陽成の母東光寺僧善徳と密
通の事ありしは左大臣とせし善徳は伊豆(流)る
右大臣の才の歳 十二月左大臣良世致仕せし歳七十四

右大臣頼有致を執る頼有は文徳の皇子ありて弓馬の
藝小達しし乃ち人となり源家の先祖貞純親王は此入
の婿たりし弓馬の藝と相傳せし
九年六月右大臣源頼有薨せし歳七十三 同月藤原
時平大納言に任じ右大臣將と兼しし源光と菅原相
とを權大納言とせし菅原相は右大臣將と兼て時平と同
く致と執行ふ大臣と稱せし置けし 七月二日
天皇位と太子教仁に譲りて朱雀院小閑帝時歳三十
又皇子院とせし後小發と判せし(小寛)年法皇とせし
初即位の翌年年號改めし光孝仁和元年と用ふ其
後寛年年號九年令て在位十年

醍醐天皇 宇多第一の皇子なり 諱教仁母藤原藤原子
と云中納言高藤の嫁なり 寛平六年小倉子小倉なり
九年七月三日元服歳十三同日小譲りせうけて即位
宇多と云と天皇と號せられたるの作作なりと大納言
藤原時平と菅原相時大納言相並で改とゆふ其儀
大内准之時平時は歳二十七甚つとて其の作
又因信の妻と奪取と世の譏りありとれも昭宣公
の嫡男とて代々の執政なりとありて當今世の長
も定りたる菅原相年の十四徳漢の才ありて事と別
なりとありて儒家より食庸食庸一時年と別て當今幼
少の中ハ何事と此の事人々もひかりとて云
昌泰元年二月天皇清涼殿とて群書法要と讀ふ

紀長谷雄侍讀侍讀より 十月右上天皇大和攝津と御
幸管丞相等供奉 十月朔旦冬至群臣賀しなり
朔旦冬至ふあつりハ右より慶賀なりとてなり
二年正月三日太上天皇のまゝもとて本徳院朝親の行
幸あり 二月藤原時平右大臣に任ぜられたる將元のこ
ろ菅原相右大臣に任ぜられたる將元のころ源光藤原
高藤大納言とてなり光仁明の子なり高藤ハ天皇の
御祖なり菅原相儒家より執り皇子外戚の上は任ぜ
故小右大臣と再上表とてしつと御許容なり
九月梁子内親王伊弉諾齋宮とてなり天皇出御ありて其儀
式あり中納言藤原因信とて齋宮と送りしむ
十月太上天皇に初幸とてひく廣飾益信戒師たり法衣

と金剛覺と云 十月東大寺より灌頂して太上天皇の尊號と臣として所々の名山巡見の橋良村と云者乃一人供奉常小其より山所と云るものなり天皇勅使と遣して尋ねし連ぞ程と成て歸京專佛道ふと申しふよりて法皇と申せし法皇の御あり
二年正月三日天皇赤花院へ朝覲して乃小管丞相供奉詩と獻し御衣と賜る寵蒙日々小より小よりて時午の心あり或は云ふ此河小管丞相と云わくせしふよりて安く作ありたれと學く祥雲として具披露す
同日高藤内倉に任て極式より味此宿中終せり 一月高藤薨て歳二十太政大臣正一位と贈り 七月慧星名あり 十月三善清行といふ

人博學とて算好小達して乃名入なり此法文章好筆の宿とありしが書狀と管丞相なりや乃る八明年ハ辛酉小ありたり天道命と改名の運小ありたり君拔群の寵恩儒家とてハ者備大臣の介ハ其例をいふ懐とありとてなれハ宿位と祥雲と云ふと申 同日法皇より野山へ御幸

延喜元年正月九日日蝕二十五日管丞相と太宰權帥小降して筑紫へ左遷せし乃り宇多在位の時密小管丞相と云く位と當今小ありつととと穢せらる管丞相と云くつととをりありつとと時と待らゆへと止し其後重く談合ありたれば管丞相息其法然と云く乃のて其時節のふれハ徳らるるげあり

ののりく養をうねはよりて天皇即位の時菅丞相の
當分の忠臣なりし宇多法皇御作せし御年御
人為菅丞相と敬ふ時年迄より源光藤原定國
藤原菅根などん職し或は菅丞相と朝臣し或は
よりの諛言と加ふるそ天皇の弟と齊世親王と云
菅丞相の婿なり故なきん宇多の讓位と云へともめ
らぬるに齊世と云ふまんのたきなりし時年養
閉せられりくなん天皇今年十七され其實言の沙
法もなりりりり時年代々の執政と威強し専ら執
約ひりりきき一源光と菅丞相よりて右左とす
法皇さき一めりて菅丞相左遷の罪と看んて同晦日
參内しるる人も勤書の士門と同く被りてり御門は

まはるる人も養内なる人もたれはゆり二月朔日法皇を
還御同日菅丞相都と出て筑紫赴く其子の入る
流罪せしる齊世親王の落飾 八月時年及大藏
善行勅と奉て清和陽成光孝の三代實錄五十卷
と撰て奉る善行の時年の師と今年七十なるり
十二月法皇東寺より灌頂し御室と仁和寺に遷る是
御室の好まり後世小御門跡と云ふも是より起るす
多法皇のとりしす所なれば御門の跡と云義なり
二年二月飛鳥舎余りて藤原の宴あり
三年二月二十日菅丞相筑紫より養年十九
四年二月皇子保明と立てる子とて時小二歳母を
藤原穩子時平の妹なり

六年正月三日仁和寺へ行幸 四日時平館カキして入餐キヤウあり
八月紀貫之ツクナニキと古今傳歌集を撰て奉る 九月法皇
金峯山へ御幸 十月延喜格と撰て

六年八月天皇史記と讀 七月大納言右大臣藤原
定國率て天皇の外舅たり 九月伊勢鈴鹿山
群盜あり其張本十六人と捕て誅す 十二月日本
紀と讀畢て宴と設け祀とあり

七年十月紀別熊野神小次一位と授りる法皇熊野
御幸

八年正月渤海の使裴瑆ハクキョウ來朝四月帰國
九年四月右大臣藤原時平薨て歳三十九正一位
大政大臣と贈りる本院の大臣と號す

十年旱天變ヒテリ恒矣ヘンケイ等あり

十二年三月右大臣源光基と歳六十九 八月大風

十四年正月京中の家と首飾焼亡 六月大水

七月大納言藤原忠平右大臣とあり時平の弟たり

十六年三月七日朱雀院小幼帝ありて法皇の下の帝と
號しあり 三月七日貞純親王薨て清和帝の皇子

深家の先祖桃園親王もあり 同日二十日風雨烈し中
納言藤原定方藤原清貫實成川の堤と巡見す

十七年大旱洛中池涸

二十年六月渤海使裴瑆ハクキョウ又來朝と正一位と授りて
歸國す

二十一年十月右大臣平惟扶ヒラヒサカと初使りて言野山カクヤ建

弘法大師號と贈り

二十二年早

延長元年三月太子保明薨る文彦太子と謚を菅
丞相の怨靈をりて云ありて其官位を徳と

二年正月忠年と在在少轉と大納言藤原定方と
在在少と定方い定國が弟をり 同月天皇

四十の禰と行り

三年六月天皇疱瘡

四年十月法皇六十の筭と禰せり

六年十月在在忠年延喜式四十卷と撰て奉る

格式の撰成の時少好く撰て清和の時換益ありて
代少全備と六十箇箇の風土記と元明の時り

撰りてのへも代々校正し此中代少成就せり

十月智叢大師號と贈り

六年六月小野道風と名て漢朝の賢王名臣の徳行と

清涼殿の南庇の壁にかりし道風がれを筆に書り

七年八月洪水田畠流れ人多く死す 九月小野道風

とて撰聖障子の繪の名と書しむ

八年六月二十日愛宕の方より黒雲起り俄少太ふ

雷をりて清涼殿の上へ落て大納言藤原清貫右中

辨平希世等侍に数輩雷たふて枕死す天皇大を

避て常寧殿へ移りたふふ管丞相の怨靈のなれ

らんとせふ云傳へりふか 九月二十日天皇

病ふりて位と沖子寛明と諡る同二十九日崩る歳

四十六 年號昌泰三年 延喜二十二年 延長八年
在位分て二十二年其年故久ありて延喜帝とありて
ありて醍醐寺の邊に葬ありて醍醐天皇とありて

六十一代

朱雀院 醍醐第十一の子あり諱は寛明母は皇后藤原
穩子と云昭宣公の娘あり

延長三年十月之歲よりして去りてあり

同八年九月は諱り改て十月即位時より八歳大后
藤原忠平攝政

承平元年七月宇多法皇崩と成りてあり

二年八月右大臣藤原定方薨と成りてあり

十月大嘗會一代一度の大神寶と伊勢及諸社へ

細り

二年正月治中群盜起り

二月大納言藤原仲平

右大臣とあり忠平の兄あり

十月殿と八十餘輩大

原野に鷹狩其裝束と盡せり

四年山陽南海海賊起り官兵と命とてと捕へり

五年唐の呉越の人將承勲來り羊と膚と

六年三月飛香令少く小ら結者あり 六月南海

海賊の張本藤原純友其流寇と發り伊豫國日振の

千餘艘の船と發り海上往來の官物と奪取せぬあり

紀淑人と伊豫守よりして遣り淑人に賞とてあり

七月海賊暫とつまる 七月吳越の將承勲大宰府へ

來り 八月忠平書状と大唐吳越王と遣り

同日忠平を改大后に任じ仲平を左大臣に任じ藤原恒
佐右大臣に任じ

七年正月天皇元服成十忠平其事と奉行也 十月
陽成天皇七十の賀と行ふ

天慶元年正月四日御衣クウケイの齋十者あり 四月
十有より二十九日まで毎日大地震 六月を左大臣
薨きて良世が子あり

二年正月忠平六十の賀あり 四月出羽國の夷賊討
六月二十二日内裏より庚申の遊あり 十月天皇
史記と讀藤原在衛等侍講 十一月平將門関東
少く礼と記し常陸國へ攻入其他又常陸大掾平國
香と教して一國と押領之時小式藏權守興世王

とま者將門は云々の一國と搦りも坂東と洛奪也
其寇國ぐるぐる云々の將門は云々の同心一郡
兵と率て下野と攻國司と出前 其より上野國へ
移り上総下総を益相撲と治へて下総の國猿鶴
郡石井郷の都と立て將門は桓武天皇六代の子孫
をハ帝位に郡ともなるの子細あり云々の月々平
親王と號し或ハ新皇とも稱す左右大臣下百官と
置たり將士をとり心のもん貴罰と行ふ或ハ
下総國相馬郡小玉城とつくりともあり同し藤原
純友海賊等と云々云々伊豫國より討し備前父子
高と捕へ搦磨久嶋回雅幹と生捕し南海と掠り山陽
山陰西海と奪んともは將門純友同時在京し治

敵山小登りて平安城と直下て互小逆心の事と相約
印意と遂ハ将門ハ王孫をれ帝王とたりて絶友ハ
藤原氏をれ八国白たりてとたりと多ん承平年中
より将門ハ関東(赴き)絶友ハ伊豫ふありわく津記
あたるが今年其約と遂へて東西小一度も乾て天下
騒動活中とつりてハ以討源経基武藏小居り候るが
急き上洛し将門ハ謀逆の事と云ふを具早く治進
よりたよりて任と授くる経基ハ貞純の子なり貞純ハ
清和第六の皇子なり(経基と六孫王と號せ候て
源姓と賜る多田満中ハ経基の子なり
二年正月将門純友降伏のため小待寺積夜(初念せ
らる)二月参議右衛門督藤原忠文と征夷大將軍に

其弟藤原忠舒并源経基等と副將軍とて関
東へ遣る小野好古藤原康季大藏春實等と將
軍として兵船二百餘艘と率て伊豫國へ發向せ又
東海東山兩道へ官符と賜り軍功ありハ賞と行る
へきり相觸るる 二月朔日下野押領使藤原秀郷
常陸掾平貞盛陸奥下野の勢と催一萬九千人を
率て下野國よとて將門と合戦を將門ハ兵數百人
討きて引退く貞盛秀郷追懸て十三日下野國に到る
將門嶋廣山より籠る貞盛大と放て將門并其從類
の家を焼十四日將門自ら辛嶋と新とて戦ふ貞
盛放つ夫將門はあがりて馬より落秀郷馳寄く
將門が頸と切ると同時に其從類百九十七人と斬る其

たくり、重なる、貞具等收取將門が兄弟、教革并其同
類藤原玄茂興世王等皆所ふて討まぬ貞盛は因
秀ら子なり又の仇多し殊小戦功と勵む秀郷は如
將門小治人そ征館へ赴く將門悦く出迎ふ秀郷其
器量輕くあつて本意遂まらざりて見如て遂
よ貞盛と力と合せ功とまはり坂東既小治りた
二月九日秀郷小從四位下と授くる下野武死兩國の
守小任せしむ秀郷は世小つらゆ依藤を乞あり其後
秀郷貞盛鎮守府將軍たり貞盛とハ從六位上叙
ちて右馬助小任せしむ因二十有將門が頸京都小判る
三月忠文等駿河國清見園より帰京とさるは純
友ハ伊豫讃岐河波淡路と掃めらるが河波及國風と

合戦一純友利と夫て川のさ其より又去依國安藝
國周防國等と濫妨一真小太宰府へ赴き官物
と奪取り村手の大將小野好古等純友と追て太
宰府へ赴く
四年六月小野好古等筑前博多津と純友と合戦
藤原慶幸大藏春實身命と捨て相闘ふて大と放
て賊船と焼く六月純友戦敗まそつとあつて若
成降奈一逃らるる純友ハ小舟小乘て伊豫國へ
逃ゆる當國の警固小居る橋遠保とま着純友并小
其子重太凡と討殺して頸と都へ送る或ハ純友生捕と
て獄中小死らるるなり八月小野好古治部
十月忠平攝政と稱と初して國白く高城の政先

忠平のありまふは後養用とて昭宣の例の如く
十月大教と行り東國西海共礼あつまらふなり
六年正月伊勢守佐々木常俊とてふれめて賀茂の社
行幸あり是共礼あつまらふなり

七年四月藤原實頼を左小任と忠平の嫡男なり
八年九月左大臣藤原仲平薨とて歳七十一批把左大臣
と號す

九年四月天皇位と御弟成明小讓と本在院小遷居
なる太上天皇の尊號と奉る 年號承平七年
天慶九年在位合て十六年

六十二代

村上天皇 醍醐第十四の子本在院同族の弟なり諱ハ

成明本在子なりわたりて成明と名なり位と讓る
天慶九年四月二十八日即位時より二十一歳なり天皇
生つささりてあそ詩とも歌とも作りなる

天曆九年正月四日本在院へ朝親の行幸沖母皇太
后穩子と太上天皇と小稱せらるる 四月藤原實頼
左大臣小轉と左大臣將と兼り其弟師輔右大臣小
任とて右大臣將と兼り又忠平院小関白を改大臣
たりて年久しうたてて父子兄弟三人同時より公
たりてすくさう繁榮なり忠平とハ小一條院と號せ
實頼とハ小野宮院と號せ師輔とハ九條院と號せ
師輔の娘安子天皇の后たり 六月參議藤原忠文
卒とて歳七十六中納言と賜りて此人將門進討の大臣將

とありて下向之跡治るゆて我功なりとてども
賞行れ御りて師輔中よりとてども實相同心
をさへよりて其少法なり故小忠文怒て實相と恨
み師輔小謙る下とて云く御食とて死て其靈よりし
實相の子孫八喜へ師輔の子孫八喜昌とて中法とて
ども将門討とてね年と歴て忠文七十條とて死たれ
世依のまことありあり 八月より後天下死奈とて
りて法社へ奉幣又續後初念せりる 九月菅原相
の廟と北野も建 十月宇治へ行幸遊禰
二年夏大旱秋大雨 八月二十四日月並見
三年正月去政大臣忠平疾ふよりて致仕實相師輔
相並て政と約ふ 八月十四日忠平薨て歳七十正一

位と贈らる信濃公小封とて貞信とて後とて大納言
源清蔭等勅使とて其葬所へ行向ふ攝政十二年
閏白一年云 九月陽成太上天皇崩て歳八十一
十一月大江朝綱橘直幹菅原文時大江維時等の傳
士小命とて詩と撰りて小野道風とて其詩と併
風繪とて書しむ後八巨勢公忠が筆なり
四年七月第二の皇子憲平とて子とて
六年藤原伊尹と傳歌所の別者とて源順大中臣
能宣清原元輔紀時文治と望城の人の命とて梨壺
にとりて後撰倭歌集と作しむ順八詩文倭歌とす
これ傳學の人なり
六年八月末在太上天皇崩て歳三十

七年二月大納言兼民部卿藤原元方卒之歳六十六
此人の娘天皇の女御となりて一の宮廣平と号り奉
るふ二の宮憲平ハ師輔の外孫なりふよりて一の宮と
して名あふまゝ分故元方恨て愛あつてとて死後
程多く女御と一の宮も亮せしむる子憲平邪氣の病ふ
とらるる元方が怒電をりてとらり

九年正月内裏をて法華講あり初てと卿とて布
鏡とありしむ 二月小節天神託宣とて右近馬場ふ
一徳小千本の松生とてとらり
天徳元年四月師輔の十等と賀し一留ひて藤壺
少て宮と殺て天盃と師輔小賜る
二年二月實相輦車と許る 十月涼經基卒之

二年二月感神院と清水寺と開礼のともあり檢非違
仗と遣して光と活しむ感神院ハ祇園なり 同月
師輔春日ハ春請られり後藤原家大信春日ハ春
請のとも多し春日ハ藤原氏の祖神なり
四年六月四日右大臣藤原師輔薨之歳六十三生つこ
仁愛とて喜も怒も色ふありとて人皆信む 八月
藤原顯忠右大臣任ぜ時年の子なり 九月内裏
炎上平安城(都)と遷されたりこのころ帝王十六代と歴
て好く炎とせり右より信らる御寶物も此所より焼失
せり神鏡ハ温明殿ふありしが自ら形むて南殿の極の
ふふかりしと内侍神ふらけ奉る神鏡と内侍所をハ
是より好る 十月冷泉院小遷居たりふ

常をくそ七月村上崩之太子凝華命おて踐祚成十八
六月藤原實賴と同日とて 十二月實賴と太政大
臣とて源高明と右大臣小轉り藤原師尹と右大臣
とて師尹ハ實賴が弟なり天皇の弟とる年とて其
弟と守年とて乃年ハ村上の愛子とて右大臣高明の
婿なり天皇即位以後も沖病愈まりなりて乃年と
て乃年小まらるべしとて人活思たりが實賴と高明と不
和なりゆきや村上の遺勅なりとて守年とてまて東
宮とて

安和元年天皇沖病愈まりて朝政多しハ
實賴高明師尹執行

二年二月右大臣師尹が家入と中納言藤原兼家が家

入と剛礼と師尹が金入一人執る師尹が家入叔
百人執り兼家が宅と有りゆき兼家ハ師輔と二男
あり師尹が姪なり 同年八月右馬助源滿仲武
藏ハ藤原善時密小中務少輔源繁延謀叛の企あり
是ハ右大臣高明がとてひて天皇と推とり乃年
と師尹せしめんとのと有りてとてこれより實賴
師尹奏聞し高明と太宰の權帥ハ左遷し繁と弟
ありて執業ハ流罪と師尹と右大臣とて藤原在衛
右大臣とて檢非違使と遣しと繁延并僧道茂と捕
て拷問し口伏しとれハ藤原千晴も同類のさしあり
はよりて檢非違使源滿季滿中の弟と遣し千晴并
從兵と捕て禁獄と禁中騷動ふかりて 八月高明

の西宮の家と梳拂ふ千晴繁延蓮茂流罪其因類
と因く少く捕へし満仲善時小賞と行り高明傳く
日本の舊記并故實小通下りる人なり其書集る
記録と西宮記と云千晴ハ秀卿が子なり或はハ高明
送心す満仲が執事たりしと實相真小よりなりて
中しゆひるとも云 八月天皇不御よりて位と御
守平小禰て冷泉院小遷居右上天皇と號せられり
以後の天子は院號あり 年號安和在位二年

六十四代

圓融院 ^{ユニユウ} 村上第の皇子なり 禰ハ守平母ハ冷泉小因
安和二年九月即位歳十一實相攝政隨力兵仗牛車と
聽られ内覽の宣旨とあり 十月右大臣師尹亮也

十二月實相七十等と賀したるふ

天祿元年正月藤原在衛右大臣小補と藤原伊尹
右大臣小任と伊尹ハ師輔が嫡男天皇の外舅なり在
衛ハ元儒家なり村上の沖村學問とみく家とこし其
嫁女小備と冠ありしと入堂庸せられり吉備公管
相の外儒家の大臣小登りて在衛一人なり 正月攝政
右大臣藤原實相亮と歳七十一正一位と贈らる
尾張公封し清慎ととととと右大臣伊尹攝政
十月右大臣在衛亮と歳七十九

二年正月始と清水除時祭と行り初役右中將
忠清等奉向 十月伊尹太政大臣小任と深兼明と
右大臣と藤原賴忠と右大臣と兼明ハ延喜の皇

子をり頼忠ハ實頼が子なり

三年正月二日天皇元服十四歳加冠ハ伊尹理後ハ兼明なり 四月源高明故より筑紫より歸洛

十月伊尹薨年四十九正一位と贈と香河公對謙徳がく益々伊尹が弟兼通と内倉小任と因白乃じびこれよりさき兼通衆議たりし時兼家の父納言なり中納言あり兼通中納言たりし時兼家の父納言なり兼通兄弟して弟小朝とれたりと懐りこころにぞ兼通大納言と歴ぐ中納言より貞小大内因白より右内相忠ハ從兄なり也人政事と相統一兼家と忠でこれと害せんとも兼家が宅へ入るののとこれと比せ
天延元年四月二十四日夜強盜源滿仲り宅と園と

大と放つをもと防ぶふよりて強盜ハ逃散せ頼大不かり家ニ首除宇強盜と尋求し武士とて内裏紙守りし

二年二月兼通と政大任とより榮小宗と香河
十月高麗より馬と載せ

二年六月兼通以下公卿祇園の社小奉幣舞樂庖瘡沖願の験あり少ありてなり 八月選子内親王賀茂の齋院となる惣として伊勢齋宮賀茂齋院代代くることとて選子ハ材との娘なり 今年天變多し或ハ彗星ありし出

貞元元年正月十日東院亡 二月より七月まで度々大地震東中洛外寺社人家多く倒て人多

く死す天智も中宮も兼通が堀川の館(行幸兼通
其館と内裏のどとくちつひて甚奢る又閑虎の
館と造て行幸とす奉る中宮ハ兼通が娘なり
二年四月兼通がうらひひとて大后深兼明が宮藏と
止て親王宣下せしの中督卿は任ぜ相志と大后深
轉下深雅儀と大后深雅儀ハ宣下天智の孫なり
兼明文ありて許賤と作る延彦の子とて今上の叔父
なれば兼通これと忌忍て大后の權とすらうり兼明
是より鬼山ふくられり身と歴て薨せり村六河子
中督卿具平親王も許文小造なり故ハ兼明と前中
書王と稱し具平と後中書王と稱す 七月天皇新
造の内裏(還幸所)の額ハ藤原佐理也と書佐理ハ

天朝まともきこへたる社書なり 十月兼通疾あり
了て同日と相志小湯の兼通奏しりるハ弟兼家が
娘冷泉女上宮小籠愛せられてみ紙産め小帝位と後
人とすらの志ありと決し兼家が太政大臣將の宿
と刺し津部卿小孫を備あさるるも死罪流罪りと
奏しられとも初許なり 十月八日兼通薨て歳
む十一遠江公小封し忠義公と稱す
天元元年八月兼家娘詮子とす梅壺小侍の
女御とすこれなり兼通が娘中宮あり故ハ兼通存生
の月他人の娘入内せど兼通薨るふよりて詮子入内
程多く皇子とす 十月相志女次女とす深雅
儀后女とす兼家女次女とす

二年二月二十七日和清水八幡宮行幸此以後代々前
社へ行幸あり

三年二月杳志の息公任清涼殿之元服 十月十日
賀茂の社へ行幸之れあり以後代々行幸あり

十月二十日内裏衣上

四年二月二十日平野の社へ行幸 七月天皇不例

殿山の慈惠傍心とあり如持ありありとて聲おき

宮中より入るりありありとありあり大傍心傍心行基

以後二百餘年大傍心あり 九月從之後菅原文時

卒之歲六十二菅原相の孫とて文才とてこれ村上の侍

讀より一人あり 十月新造の内裏(還幸)

六年正月殿山とて慈覺智證の西門流相争て駭動

そ藏入牛恒昌と勅使して金山之れとあり慈惠

とありとと止し 九月殿山僧齋然大宋國へ赴く

十月十七日内裏回祿天皇堀川院小遷る

永觀元年二月檢非遣使小命して京中幾内たり

小弓第兵仗と帯する者と及捕し 二月圓融

寺と作て供養とて殿山の慈惠仁和寺の寛朝等僧

綱治あり

二年八月天皇位と沖姫師貞小讓る也と天皇の尊

號と奉る 年號天祿三年 天延三年 貞元二

年 天元六年 永觀二年在位今て十六年

六十五代

花山院 冷泉第一子諱師貞母藤原懷子攝政伊弉

の嫁より圓融院の東宮となりて永觀二年八月二十
七日小薨りとうけて即位時十七歳桓志園白丸の正
此府小冷泉圓融存生より共小冷上天皇と稱せ
寛和元年四月藤原齊明其弟保輔と悪黨の張本
少く藤原季孝大江進衛と又傷一匡衛が后年の指
切廢る齊明保輔行方ありて逃亡して法園へ下りて
齊明と近江に媽郡を誅せしむ 天皇即位のときり
関白桓志の娘と后平親王の娘と大納言藤原朝光
が娘と二人とより女御とせ又大納言藤原朝光の娘
恒子とより弘徽殿小室と女御とせ甚寵愛せしむる
きの二人の女御はあれどもなきがごとく一歳経て恒子
病で死す天皇をげさるるより一少く邪行の病と受け

世と捨りの志あり沖父冷泉上皇も此病ありて猶い
ゆざりしを天皇又ありとて近江等これとせしむれ
とも悲歎やまざり 同年八月圓融上皇藤原朝光
法皇と稱す圓融院小遷り居るふ
二年天皇弘徽殿の女御と慕て出家の志いせしむ
六月二日の夜中夢に貞觀殿の小門より志のびか
て死入藤原道兼と僧叡久らりとて依りて龍山寺
小御もじり藤原朝光入覺と號す沖成儀十九人
これとありとて天文博士安倍晴明何心もなく
庭より入て天子とて天子とせりとて天變ありとて奈
驚く息者月をたて天皇をさしとせりとて百宿治めと
身われども入るるありとて依りて處とせりとて奈

花山寺のく天智院小僧となり乃ちては錦く
中納言藤原義懐左中辨藤原惟成八常小近衛し
乃ち人同判發之在位二年年號寛和

六十六代

一條院 圓融第一の子諱ハ懐仁母ハ梅壺帝弟藤原詮
子右大臣兼家娘なり花山即位の時懐仁と東宮と
そ花山遁世の時兼家為さる月一東宮と守之
即位時小七歳兼家攝政を右大臣と稱しと其母乃
先と右大臣と之少府令泉と右上天皇と稱之圓融院
山法共法皇と稱之三人在少政小乃りて行幸と名
弟家統のふ
永延元年正月齋院来より佛像一切發等と持

てあり 十月兼家が東三條の館へ行幸 十月右大臣
水へ行幸 十一月加茂へ行幸これとあはれ行幸と云
二年六月強盜の張本藤原保輔と云者中納言藤
原顯光の家小籠所の宿兵と遣しと此と捕小保輔
自害之 八月兼家二條京極の宅と作て百官と
扱て遊宴之涼根光駒三十四と常ある右大臣
以下小此と配分之 十月兼家が館小行幸其六
十の筈と質之兼家司二人任官
永祿元年正月圓融院の法皇ハ朝親の行幸
二月兼家嫡男道隆と内大臣と右大臣と兼小
三月春日行幸 六月前關白藤原賴忠薨之歲
六十六駿河小封しと康義とと稱之 八月大風

宮城諸門其外神社多く顛倒 十月兼家太政大臣小任也

正暦元年正月天皇元服十一歳 有弟家病小

よりて發と削て東三條の太入道と號と道隆と攝

政とて兼家小代て政と行りし 七月日兼家

薨る年六十二病中兼家よりよりて繼ぎ其館と

寺よりて法興院と號と攝家の院號とて如とて

二年二月圓融法皇崩る歳二十二 九月右大臣藤原

為光と太政大臣とて源重信と右大臣と藤原道

兼と内大臣とて重信の左大臣雅信が弟道兼八道

隆が弟たり 十月梅壺の皇太后薨る子尼たり

東三條院と號と右の院號此より始て女流と稱と

三年六月太政大臣為光薨る歳六十一相模公より

封とて恒徳公と稱と 十二月源忠房小執とて

海賊の張本河内親光と捕ふ

四年四月道隆攝政と稱とて関白たり 六月

菅原相と太政大臣正一位と贈りり執使筑紫の安

樂寺へ下向と 七月右大臣源雅信薨る歳七十四

此人の娘倫子ハ兼家の三男道長小嫁と

六年二月源滿政平惟持源賴親源賴信等の武士

とて處と分遣と群盜と捕ふし 七月源重

信と右大臣小轉と道兼と右大臣より道隆と長

男伊周と内大臣と

長徳元年正月女流へ朝覲の行幸 二月道隆病小

よりて唐飾養用し其子伊周と假の園白とをば
かく道隆貴とて歳年十二 四月右左衛門道兼と園
白とを伊周とて叔姪の間ひつゝ一々道兼と
調伏せ 五月七日右左衛門道兼貴とて歳七十四
八月園白道兼貴とて粟田園白とて八月は是なり十一日道
兼が弟右左衛門道長と園白とを道兼が早世と聞て
伊周よりこふに園白たるんと思所小女流の心ふりて
道長位せられたるは不年なり又道長と調伏せあり
まども其験なり此所疫病もふりて云郷以下多
病なり 七月道長右左衛門とて此より道長朝政と
行ひいさしめ

二年正月花山の法皇畿内近國と巡見して弟へ皈

て鷹司の四の君とて之より女房とて遊せり四の君の弟二
の君は伊周とて法皇とて馬ふありて四の君へ
くふにふるとこの君へくふとて伊周とて弟中納言
隆家とて是れ月の次法皇とて御ひて去と射とれば
御殿中も法皇驚くとも此とて不許されとも
其年とてんたふたりて四月伊周とて執事へ法隆
家とて法皇流とて一とて御親光同親親等とて一と
法中とて一とての檢非違使とて一とて伊周隆家が完と園
ありて其法皇とてけつて取所へ送とて法隆寺好生
の母道長とて和守り道長法師の女流へとてありて
中とてありて去ひつゝ伊周は嫡流とて道長と
二人のを尊とて女流とも調伏せり也とてありて

長保元年三月 藤原元在を中宮定子とて誕生す
七月 道長を左大臣とす 藤原元在を右大臣とす 兼道子
たり

二年 四月 伊周瑞家為り 中宮定子とて誕生す
八月 定子ハ伊周の妹なり 伊周流罪と憤て歿す
九月 藤原公季内を右大臣とす 師輔が末子 道長を叙す
十月 多田満仲卒す 寛和の法より 刺殺し 攝關たり
田院ヨシ房をり 今年ハ十八とせきとす 其子 松光
親親 賴信 武敏 一連し 朝家の守りたり
四年 九月 後深の海賊とて 南蠻人を捕る 太宰
府より 誣進

長保元年 三月 関東より 下野守 平維衡 貞盛子 平
致相 秋小 金成 たり ふより 明法博士とす 其罪
と給り せし 致相 流罪 八月 太宰府より 南蠻の
海賊とて 十月 道長を 娘 彰子 入内 藤壺の女
御と號す 其後 中宮 定子 崩す 彰子 中宮とす
二年 六月 疫病 あり ふより 下野守 社とて 疫神
とす 今宮の 御靈と號す 十月 内裏 焼く
十二月 東之條の 女院 詮子 崩す
四年 二月 僧 寂狂 大宋國へ 遣はす 其人ハ 吳郡 止つて
歸朝せり 六月 二十一社の 奉幣 使とす
六年 十月 新造の 内裏 遷す
寛弘元年 十月 始て 北野の 社 行幸あり

二年二月伊周を殺し、春月その朝政を執りしむ
六年正月伊周を去り、推して封戸と爲す此を儀
同之司と云其儀之云不同と云義なり 二月元
山法皇崩り歳四十一 閏月中宮彰子上東門院へ
遷居すもまうて上東門院とす紫式部此中
宮小宮と爲りしとせり賀茂齋院選子内親王より
上東門院へつゝと皇子と所望せりまうて
式部と源氏物語と作しつゝと齋院へ進せりまう
と云ふなり

六年七月二品中務卿具平親王亮を歳四十六
十二月参議管原輔正を歳十八此人家業を
継いで博學なり死して海小針の事は不詳なり

七年正月伊周亮を歳三十七

八年六月十二日天皇病小よりて位を東宮后貞親
王小譲りて二十二日崩り歳三十二 年號永延
二年 永祚一年 正暦六年 長徳四年 長保
六年 寛弘八年在位今て二十六年

六十七代

三條院 冷泉院第二の子弟八后貞母八皇太后藤原
起子と云攝政兼家が娘なり 一條即位の后貞を
東宮とす 寛弘八年六月譲りて即位歳三十六
道長朝政を執りし初め 十月冷泉太上天皇
崩り歳三十二

長和元年正月道長娘妍子と中宮とす 二月二

十一社より奉幣を穀と祈る

二年九月道長が館小行幸 十月石清水(行幸)

十二月賀茂行幸此より以後代々あるは行幸あり

同月中宮少進藤原雅^子作^子者同所の土藤原

惟兼^子と教^子の道長怒りて惟兼とてうりて禁獄也

三年二月九日内裏焼亡 六月道長の館より行幸

競馬騎射等の冲遊あり 六月叡山惠心院傳都

源信寂也

四年九月内裏送果 十月道長の十の筈と賀せ

りの 十月内裏又奏と

六年正月天皇沖月くらに疾ありて位と東宮教
成不諱と太上天皇の尊號と奉る在任六年

年號ハ長和

六十八代

後一條院 一條院の子なり諱ハ教成母ハ中宮藤

原彰子^{上東門院}と號と左大臣道長の娘なり二條院即位

の時教成東宮とある長和六年正月不諱とある

即位九歳なり外祖道長攝政其儀忠仁公の例

の如し二條の白皇子教明と東宮とせしむ

寛仁元年正月二十日強盜内裏入る院にの内

舍人藤原長輔と道長の隨力藤原良^{ヨシノブ}等とて

向く此と射殺せ二人よ賞と行りる 二月道長

左大臣と稱して右大臣^{ササキ}と稱して内大臣

左公季と右大臣と道長の嫡男大納言賴通と

内大臣とて道長又攝政と執通不諱と執通時よ
二十六歳執通の弟中納言教通方生將とす
六月二日道長被殺と一條の所よ由へて三千餘人
よ移りて 同日九月二條院太上天皇崩す
甲十二 六月二十七日盜道長の庫へ入て沙令千
之百餘あるをぬきて逃る月と暦と掃磨國とを
件の盜と捕り 八月東宮教明親王邪氣よ
よりて自ら位と退く小一條院と號し太上天皇
よ雅と御弟教良と東宮とて此も道長父子の
ちりしひたるべし冷泉園歌の流るるく在位
なりしとてよ死て冷泉の宮統へ終る
九月道長不清水よ齋宿公卿以下相次ひ遊女等

おぼし小淀川と流る舟の千餘艘あり其月一艘高沈
て死する者二十餘人 十二月道長を改名よ任を
攝政執通勅使たり
二年正月二日天皇元服道長加冠執通理髮たり
二月道長の娘成子入内女御とす其後中宮とす
十月道長が館へ行幸
三年三月道長廣飾成の子世の人と入通稱と云
他人刺殺する者ありて入通と云りて 四月日
長國の海賊の千餘艘壹岐嶋へ亂入て嶋守藤原
理忠と害する中太宰府より中ふりて宰府の
宿兵とて以て賊と平げし 九月道長東大寺
よて受戒 十一月又叡山よて受戒 十二月

桓通攝政と止くし、國白くする

四年二月道長法成寺と作り新の堂と作り無量壽院と號し又六の阿比陀九體と安置せしむ所の佛像も多し
七月大風殿門多く損ぞ

治安元年六月左大臣藤原顯光薨す歳七十八

七月右大臣公季と左大臣とを國白内大臣桓通左大臣とす藤原實資右大臣とす藤原教通内大臣とす
十月春日へ行幸

二年七月道長法成寺の金堂と作り供奉せ

天皇行幸あり太政大臣公季以下治者治沖齋會小推せしむ太皇太后勅子皇太后皇孫妍子中宮威子治行啓あり此二后は治道長の娘なり此沖堂と作

少りて道長と沖堂の國白く號せ

萬壽元年二月京中強盜多し檢非違使此と捕ふ

九月桓通が館へ行幸 十二月大納言公任致仕

其桓忠の子壽秋管經の達者なり倭漢朗詠を此人の撰なり

二年八月尚侍藤原嬉子の道長女との娘なり

東宮教良へありて寵せしむるやと誕生す百と

歴て年と歳十九一條の沖時より公孫道長名事のまうりつてさうらひたりて教人のあり嬉ふふと一佐と贈り

四年正月上東門院へ行幸あり 九月皇太后

妍子崩す道長の娘一條院の后なり時小歳二十日

十月道長病あり上東門院に中宮も挿すの祈
念あり二十六日法成寺へ行幸ありて道長の病を
新ひ治す 十月初日道長薨る歳六十二三
代の間攝政園白少く天下と下知りあり二十九年
一條二條當今東宮留其婿なり男子は攝関
大臣卿相とす物家の繁昌此少極まり赤深
衛門が御り物部十卷ハ大半道長榮光の
事と託せり 同月四日大納言藤原行成奉を
歳六十六結書の人也世尊寺の家の子を代々
結書あり
長元元年四月肥後高階成尊藤原時在平局
行等私に金銭せんを其罪科と定り 六月

前上総久平忠常下総國とて礼と託を右大臣實
資奉りて檢非違使平直方中原成道と遣へ
東海東山の兵と遣へこれと討へ
二年六月園白賴通白川別業大后以下と稱競馬
舞樂あり道長薨る後賴通相繼て政をば
ひまらふを 十月太政大臣藤原公季薨る歳
七十二甲斐公討へて仁義中と稱之此以後謚號
の所法を君臣は院號ありたり公季と閑
院大臣と號を具子孫清華之流あり二條西園
寺徳大寺是なり 十二月檢非違使中原成通
と御事の忠常と討へ功をさかへたり
三年二月安房守藤原光業園と捨て上総忠光

と懼て多かり平政輔と安房守小任せり九月
忠常兵威強くして平直方も功なきふより
且つ甲斐守源頼信も命なく坂東の軍勢と
集りて忠常と討しむ

四年三月頼信兵と争て忠常が城と攻其城海
邊より入忠常並くと知りて船と悉りて
これハ頼信濟すべくやうすも頼信が勇
かひ多かりたり也へ後頼信より所を推量て馬と
海へ入り入れが士卒の中ハ後頼の常月とあり
乃ち者ありこれも好ハ然しといも多かりたり
つとめり勢と多し其後頼と導すふよりて軍勢
若馬よしく海と涉り忠常も其威ふとそれ付ふ

まゝとてさりとて降参りて頼信即ち忠常以
石見へ上洛せり夷漢國と忠常病死其頸
と斬て京へ送り獄門小曝せり 十月上東門院
ハ幡任者参詣

六年十月月從一位源倫子七十の質あり是ハ道長
の室あり上東門院中宮頼通等の母なりハ天皇
の御祖母なり

七年九月大中臣輔親勅使りて伊勢へ系宮松
實の中より青玉とぬり歸京りて奉る
八年六月賀茂齋院選子内親王薨りて歳七十二
上東門院と甚眩

九年四月十七日天皇崩りて歳二十九中納言源顯基

近臣たりたりして進慕して大原とくく出帝を
同年九月小中宮成子と名をく 年號寛仁四年
治安三年 萬壽四年 長元九年 今て五位
二十年

六十九代

後朱雀院 一條の子諱ハ教良母ハ上東門院ハ
後一條院と同腹より寛仁元年東宮と名を長元
九年七月二十八歳とく即位外舅右大臣棟通
相移とく関白とくなりて改と執る
長暦元年正月棟通娘嫫子と名を御とく天皇東宮
小ありし時道長の娘嬉子と名を皇子親仁と生て嬉
子卒とく其後小三條院の娘禊子内親王と御息

所より皇子尊仁と生り嫫子ハ天皇の父教康親
王の娘よりと棟通養て入内せり 三月
中宮ふまりの

二年正月上東門院へ朝覲の行幸 同年の冬
三井寺の明尊坊とて天台座主とて
三年二月叡山の衆徒等杖と棟通小捧と明尊ハ
智證の門流たり慈覺の流小ありとこれハ座主と任
せとと稱ふ棟通何の門流とても其人よりとて
山後姑とて大響とて棟通の館小見とて敬新とて門
柱と打傳と棟通姑と平直方ととく山後と防山
互に相殺ふ死傷の者多し山後の張本定勢カキ取
捕と棟通と 六月上東門院落飾明尊戒師

乃り 同八月二十二日二十二社奉幣の勅使と定
めらるる二十二社に伊勢石清水下上賀茂 松尾
平野福河春日大原野大神布土大和廣瀬龍田
梅宮吉田廣田祇園北野丹生貴布禰等あり毎
年其社々の氏子と勅使と奉幣せらるる
長久九年九月内裏奏上神鏡梳くまわれども猶
光と現るるにふりて其庚とあつめて安置す天皇は
東北院へ遷りたりゆふ此院は上東門院の遷るる所
法成寺の傍あり
二年三月日花宴あり文人詩と獻し其方と試
らる此は天朝の及費小准とて嵯峨淳和の法あり毎
年約られ此時とて絶せんとせん

二年三月大納言源師房娘女御とて師房は村と
の孫具平の子道長の婿なり此家と村と源氏と
號して清華の族なり今の久我中流等の祖なり
四年夏旱と僧仁海面と祈く験ありとて禁と
許さる
寛徳元年十月上東門院不例なりとれは一人の
傍と敷佐養せらるる
二年正月十日天皇崩と年三十七生れつとて
あくまらとせしむ政智は清和通沙流とれは中心
のまらとせしむ 年號長曆三年 長久四年
寛徳二年今と在位九年

七十代

後冷泉院

後朱雀の長子詳ハ親仁母ハ藤原嬉子
道長の娘なり後朱雀即位の時親仁とをりて
寛徳二年四月より即位冲歳二十一換通関白の
ご

永承元年正月右大臣藤原實資薨と成九十
實頼の孫なり小野の右大臣と號く此人の作なり
記録と小右記と號く 七月後一條の皇女章子
と中宮とす

二年八月教通内倉より右大臣と轉ぐ之頃言換
宗内倉より右大臣と轉ぐ弟なり

四年十月殿との秋ありこれ八村との冲時より
代々興行せらるる事なり 十月春日行幸諸

國の神社へ佛舍利と一粒納りぬる

六年十月祖母上東門院へ行幸 十二月換通の

娘寛子と皇居とす中宮とハ同トヤウの事とす
まじくも先代の時より中宮皇居並にまじくも先代より

六年換通宇治の平等院と建り 今年奥羽の

夷賊安倍頼時とあり者礼と記し國中と掃ふ

よりとす源頼義と陸奥守と鎮守府の將軍と

兼ありと東征せし頼義ハ滿仲の孫頼信の子なり

頼信の忠常と討し討より頼義既小軍功ありふ

よりとす關東の武士者もとよりんぞ頼義奥羽へ

入しとす頼時とそれと隣系と國中早とす

よりとす頼時が子貞任法不背よりとす罪不犯

とて頼時怒て負任相たふ衣河の館小川籠と
頼義小治りてこれふよりて軍勢一萬と聚衣河と
攻圍て全滅止こくす

七年十月松尾平野へ行幸此處に一行軍の先

例多し

天喜元年六月頼通母源倫子薨て成九十天皇の
曾祖母なり

五年九月頼義奥別もく安徳頼時と合戦す
頼時去ふありて此を負任殘黨と聚く河崎の
柵ふありて或は河堰城とも云り 十月頼義
千百餘人と穿て負任と成じ負任四千人と穿て
防ぎ残ふは帝風雪烈く官軍兵糧竭く大に

破まてく此の者む百人頼義其嫡男義家即從藤
原景通大宅光任清原貞廣藤原範季藤原則明
とつづり七騎よりなり大敵小圍り義家時小
二十歳許強う精兵少く敵と射戦をく甚多し
光任等命と輕く防ぎ戦ふ敵我帯れて引退
く頼義天子まぬれて國府小治り此時敵義家の
武勇と畏てたぐ人々をくは橋太郎と云ふと
よりこれより義家とハ橋太郎と號をく一統を
衣清水ハ橋宮もく元服をりふよりて其稱號を
このり 十二月頼義出羽國司源齊頼等以下
諸國へ獨り軍勢と擧ぐし兵糧乏ふよりて
ある者をく放し負任よりて送成と擧ぐ官物と

押領之或は不齊頼ハ鷹岡より頼義ニ從ク
奥州よりありしなり

康平元年八月大極殿奏

二年七月同日頼通左大臣と辭して教通と左大臣

任し頼通と右大臣と頼通が長男大納言師

實と内大臣とと父子兄弟に人任梶のとなりし

汝阿當官の大納言に人の内任信長家ハ頼通が

弟より源師房ハ妹塔より信家ハ頼通が姪とて

教通が子なり

四年十一月頼通七十の筭と頼通 十一月頼通

太政大臣小任と 七月右清水質茂行幸

五年春源頼義陸奥國司の任終りよりて高階

経重と國司小任せられ下向せしなりも自任が罷小

おそきそのうへ國中の兵治頼義ふらむよりよ

こしく経重敏治と 同年の七月出羽國仙北の

任人清原武則一萬人の兵とありし頼義へ加

勢し頼義これより力を得し 八月四條

自任が叔父僧良照がよりし 小松の柵と及ばる

自任が弟宗任よりし 合戦を頼義の弟次等と

戦しふ宗任歿して引退す 九月廿日自任月

六千餘人と率て来る武則これとて放り城攻

めて戦しし味方の勝利なりし 云頼義がよむなり

して武則と相争ふ諸軍とらげし 合戦を年の

別より同の別とて義家及其弟義綱のよみ

以て攻められたる貞任戦うけて磐井河を越え河を
官軍つゞぎて攻められたる貞任長河新へ逃入るる日
頼義長河園を打破る貞任鳥海柵へくるる十日
官軍鳥海を攻め貞任が兵度ふく多く討きて
厨川柵ふくも十四日厨川へ押寄十六日終日終
夜相戦く寄子も城中も討つるもの多し十七日
貞任城をたたく貞任拒戦ふ官兵鋒を以て貞
任をつゞぎたす一楠小のせき頼義の赤小のる
其長六人あまの腰のふくも七人守の上男を
中へふく人としてこれと罪せり貞任遂に死す
歳二十日其子十世童子十二歳城をたたく今致す
頼義其勇を感すくちりんと云る日と武則と

めくころこし貞任の母重任家任并其黨藤
原経清等皆斬殺す宗任并其弟則任叔父
為元等降参して國中悉く平く永承六年
より康平六年まで十二年の間会戦のたびふ
義家武勇格群をりふりて武則を始め東國の
武士皆畏く服す

六年二月頼義の使者上洛し貞任家任経清が
首を獻る京中貴賤群聚してこれと名を頼
義正四位下小叙し伊豫守小任せらる義家
從五位下出羽守小叙任せらる義経は左衛門尉
小少将武則は左衛門下小叙し鎮守府將軍小
任せらる使者藤原季俊物部長頼も貴を

行り

七年十月東北院へ行幸ありて祖母上東門院へ
謁せり

治暦元年二月堀川右大臣藤原頼宗薨せり最七

十二 六月藤原師實右大臣小なり源師房内

大臣とす 九月家業金堂の法華八講行り

十月法成寺造替供養の日行幸

二年十月十六日相通が尸痛よりて宇治平等院

へ行幸請狀管経船遊等とてより舟を其経營

の具ハ金銀珠玉と云々なり相通准之原の

宣旨と云々十七日小還幸相通年をて小七十

小あまのりゆへ此所小山莊せりゆへ常小住りのゆへ

宇治関白と號せり関白と上教と云々も勅許な

きゆへ宇治小盾と云々も朝務大臣と云々あり

りの沙汰せり

四年正月九日日蝕と云々先例よりて御膳小

簾と云々朝拜の禮行りれり 四月十九日

天皇崩せり成四十四 年號永承七年

天喜五年 康平七年 治暦四年 今在位

二十二年

天保乙卯歲冬十二月二十六日益城下縣
紙用郷柏川村重見山河羅宇智谷乃
雪の山嵐うしくあま

中村萬喜直衛

